

歴史民俗資料館特別展

池田氏と

牡丹花宵柏

第二回

今回は、連歌と連歌師の特徴について触れましたが、今回は、現存している連歌作品を取り上げて、池田氏と連歌の関係について紹介します。

池田氏と連歌

まず、文明13年(1481)ごろに成立した飯尾宗祇の『老葉』初編本です。文中に「池田若狭守許にて千句侍りしに」とあり、池田氏が催した千句連歌に宗祇が参加していた



ことが分かります。また、池田民部丞の連歌会にも宗祇が参加していることが記されています。ここに見える若狭守は池田正種のことです、民部丞は池田綱正のことだといわれています。

正種ら池田一族の句は『新撰菟玖波集』にも収載されています。同書の作者と句数の一覧である「作者部類」には、一族7人の名前が挙がっています。他の連歌作品にも正種らの名前が散見し、池田氏が優れた連歌を生み出していたことが分かります。

連歌会の持つ意味

文明17年(1485)3月に「新住吉千句」という連歌会が催されました。この連歌会については、それぞれ百句ごとの冒頭1〜3句と、その作者名を抜き出した資料が残っています。連歌会すべての句と参加者は分かりませんが、この資料から次の人物の参加が確認できます。

池田氏からは正種、綱正らの名前が見えます。ほかには、幕府の管領職にあり摂津守護であった細川政元(1466〜1507)や、池田氏と同じく細川氏の被官で摂津国内に勢力を持っていた国人の能勢頼則、伊丹元親、塩川秀満らが参加していたことが分かります。

作品としては、政元が最初の百句の1句目(発句)を、頼則が2句目(脇句)を詠んでいます。連歌会において、1句目を主賓が、2句目を主催者が詠むことが式目で定められています。この内容から、「新住吉千句」は能勢氏の領内に住吉社を勧請したことを祝って、政元を頂点にした摂津国内の被官たちが行った連

歌会であることが分かります。

前回、連歌の特色の一つに、お互いの句を鑑賞していく間にグループ内の連帯感を高めることがあると述べました。この会は、国人同士の連帯感を高め親睦を図ったものといえます。

連歌資料に見る池田氏の変遷

このように、連歌会を通して結束を固めた国人たちですが、永正4年(1507)以降、政元の養子で九条家出身の細川澄元(1489〜1520)と、同じく養子で同族の阿波守護細川氏出身の細川高国(1484〜1531)の間に、政元の後継をめぐる争いが起こりました。これにともなう、摂津の国人たちも両派に分かれて争い、さらに同族内でも分裂が生まれ、激しい合戦が起こりました。

池田氏は、筑後守貞正が澄元派、同族の遠江守正盛が高国方に分かれて争いました。そのため、同5年(1508)4月に高国方の細川尹賢から攻撃を受け、池田城は落城し、貞正以下20人余りが命を落としました。その後、正盛が池田城主となつて池田氏の家督を相続することになりました。

ところで、連歌は一つの文芸というだけでなく、神仏に願いや感謝を込めて奉納するために創作されることもありました。古くから和歌や漢詩などが奉納されていましたが、連

細川尹賢書状(個人蔵)



歌が流行した中世後期には、連歌作品が奉納されていたのです。

正盛は、同6年(1509)2月に「池田千句」という連歌会を主催します。この連歌会には宵柏をはじめ、飯尾宗祇の弟子である宗碩(そうせき)など当時有数の連歌師が名を連ね、池田氏の一族も参加していました。この「池田千句」は、開催された時期を考えると、正盛が一族内の混乱を収めて、家督を相続できたことを神仏に感謝した連歌会の可能性がります。

このように連歌は、文芸としての連歌以外に、当時の社会で別の一面を併せ持つものであったことが分かります。

問い合わせは歴史民俗資料館(☎751・3019)

## 人力車と池田

### 人力車に初めて乗る

人力車は、明治時代に入ってから、東京で創案されたともいわれています。庶民の交通手段が未発達だった当時、たちまち全国に普及しました。

池田の旧家の日記には、早くも明治10年（1877）、箕面での紅葉狩りの帰路、初めて人力車に乗ったと、誇らしげに記されています。すでにこのころには池田のまちでも、新しい時代の乗物を眼にすることができたようです。

### 余野〜池田間3往復

その人力車の運賃ですが、明治36年（1903）の『大阪府豊能郡案内地図』によると、阪鶴鉄道池田停車場（現JR宝塚線の「川西池田」駅）から池田町まで8銭、木部まで10銭、多田院へ20銭、箕面まで25銭、妙見鳥居前まで35銭。雨天夜中は割増ありとなっています。

ところで、大正8年（1919）



戦後の阪急「池田」駅前に並ぶ人力車

### 交通機関の発達で

発行の『東能勢村誌』によると、そのころ、東能勢村（現豊能町）では人力車の利用客が多くて車夫が足りず、時には一人でも池田へ3往復することもあったと記されています。池田と余野間は、片道10キ以上。それも現在のように整備されていない路面の道を、人を乗せた車を引くのですから、当時の車夫の脚力には驚かされます。

しかし、庶民の足であった人力車も、郊外交通機関の発達や、自動車や自転車の普及に押され、次第に衰退していくことになりました。

昭和3年（1928）、府内で2千台以上あった営業用人力車は、同10年には五分の1の444台にまで激減しています。池田警察署管内の営業用人力車も、自動車の進出で

年々減っていることが、同6年の新聞に掲載されています。ちなみに、同14年の統計では、池田では人力車22台に対し、自転車3798台、乗用自動車85台でした。

### 戦後も走った人力車

昭和33年（1958）の朝日新聞に、池田でただ一人残っていた62歳の現役車夫が紹介されました。最後に、その車夫が語っている話を紹介しましょう。

「池田にも戦争前には四、五十人の車夫がいましたんやけど、いまでは：わたいた一人になってしまいました。：こないだも遠足に来た小学生がわたいの車を見て、わア無法松（注）の本物があるよ」と黒山の人だかりだす。：いまではまっぴるまに乗ってくれはる人はあれしまへん。：こんなんは時世おくれやさかい、しゃあないとわたいたもあきらめてま。しゃあけど夜さりには毎日必ず二、三人のお客さんはありまっせ。：せまアい路オ地をはいるのはこれに限りまっさかいに。：車代は一キロ半が七十円の勘定になつとります。：この土地に古いさかいに、どんなところでも探して親切が、だれにも負けへんサービスだんな」（注：無法松の一生）

問い合わせは社会教育課市史編纂  
☎753・2904

## みゅうじあむ・がいど

館名	展示名(期間)/みどころほか	開館時間/休館日/料金	地図
市立歴史民俗資料館 ☎751・3019	●企画展「はがきいろいろ―葉書が描く時代―」 ~10/8日 ●特別展「池田氏と牡丹花肖相」 10/20(金)~12/3(日) ☆ミュージアムミニトーク (10/22日)14:00、聴講無料	●10:00~18:00 ●月・火曜日・祝日、10/11(水)~19(木) ●無料	
(財)逸翁美術館 ☎751・3865	●特別展「細川護熙・加藤静允 数寄に生きる 一書・画・陶磁―」 ~10/9(祝)	●10:00~17:00 (入館は16:30まで) ●月曜日(祝日の場合は翌日) ●一般1,000円、学生500円、中学生以下200円	
(財)阪急学園 池田文庫 ☎751・3185	●宝塚歌劇と民俗芸能 10/11(水)~12/3(日) ☆講演会…宝塚の民俗芸能研究の歴史的要義―「国民文化」と「地域文化」のはざま― (11/18土)13:30、聴講500円	●9:30~17:00 (入館は16:30まで) ●月曜日、第1水曜日、祝日(月曜日の場合は翌日) ●200円(図書館は無料)	